自然災害研究協議会　中国地区部会　研究論文集　第 8 号　51 － 54（2022）

古記録の鹿家村御用留に基づく嘉永 3 年糸島豪雨の土石流災害の特徴

西山浩司*・細井浩志**

*九州大学大学院工学研究院，**活水女子大学国際文化学部

1.　はじめに

嘉永 3 年（1850 年），梅雨前線が九州北部に停滞する気象状況で，旧暦 6 月 1 日（新暦 7 月 9 日），現在の福岡県北部にあたる筑前国と豊前北部で豪雨が発生し，怡土郡，鞍手郡，遠賀川流域を中心に深刻な被害をもたらした [1]．怡土郡（現在の糸島市：**図 1**）に着目すると，神在村で 3 名，真名子村（福井村内）で 4 名，鹿家村で 3 名の犠牲者が出ている [2]．また，鹿家村に隣接する肥前国の渕上村，谷口村，濱崎村，岡口村も被害が大きく [3]，岡口村で 4 名 [2]の犠牲者が出ている．しかし，犠牲者の具体的な被災状況についてはどの文献にも記載がなかった．そこで本研究では，村々の諸事情が記載されている古文書資料（庄屋資料など）から災害に関する記載箇所を探し出し，具体的な被災状況を明らかにすることを目的とする．ここでは，県境に位置に，玄界灘に面した鹿家村を対象に，当時庄屋を務めた諸岡助蔵が村内の諸事を記録した嘉永 3 年御用留 [4]に基づいて，犠牲者 3 名の被災状況を調べ，現在の鹿家地区の災害リスクとの関連を調査する．

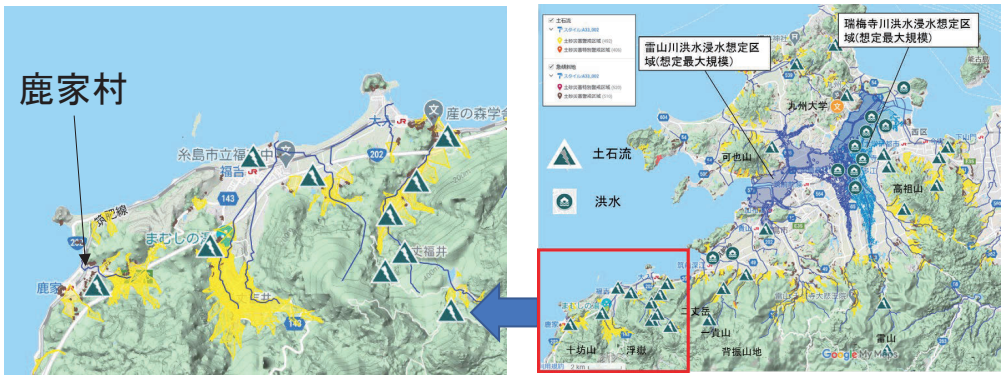


図 1　嘉永 3 年糸島豪雨の被災状況（当時の怡土郡）

2.　鹿家村の被害状況

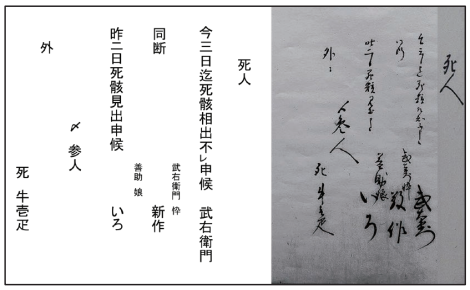
御用留には，16 棟の住宅が被災し，大きな岩が崩れ込んできて住宅を押し出したもの，床上または床下に泥が入ってきたもの，家屋敷が跡形なく流されたものなどが報告されている．そのうち 8 棟は居住できない住宅で，流されしまった住宅 2 棟，破壊状況が酷かった住宅 6 棟であった．また，犠牲者の記載に関しては，二丈町誌 [2]に示されている通り，3 名の氏名が記されていた（**図 2**）．そのうち 2 人（武右衛門とその息子新作）は被災後 2 日経っても遺体が見つからなかった．もう一人は女性（善助の娘いろ）で翌日遺体となって発見された．

3.　犠牲者の被災当日の行動

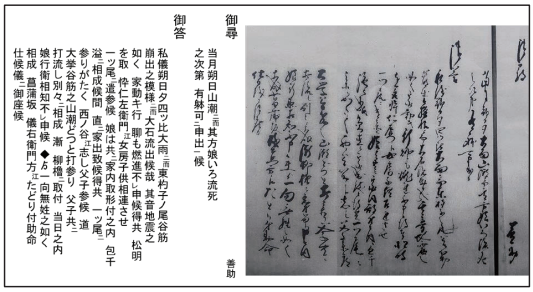
図 2 が示すように，御用留は犠牲者の家族などからの証言も記されていた．まず，善助の娘いろが犠牲になった経緯を述べる．善助の被災後の証言では，旧暦 6 月 1 日夜 10～11 時，大雨が降って東杓子之尾付近では石が崩れ出したようで，その音は地震のようであったと記している．善助の妻と子を息子仁左衛門に託して一ッ尾に避難させ，善助とその娘いろは自宅に残って作業をした．自宅のある包千が溢れてきたので，善助といろは直ぐに家を出で一ッ尾に向かったが避難できず，方針を変えて西ノ谷に向かったが，山潮（土石流）に巻き込まれて親子別々になってしまった．いろの行方がわからなくなり，善助は櫓（やぐら）に取り付いて，やっとのことで菖蒲坂の儀右衛門宅に辿り着き助かっている．その際，善助本人の状態が「無姓の如く」だったことから，泥にまみれて誰なのか区別できなかったものと推測される．

次に武右衛門，新作が犠牲になった経緯について述べる．武右衛門の妻の証言では，大雨で洪水になっているため，亭主の武右衛門から子どもと一緒に寅作宅に行くように言われて避難している．往還（当時の主要道）では既に水が上がってきている状況であった．一方，武右衛門，新作は自宅に残って作業をしていたが，家屋とともに流されてしまったとのことである．また，武右衛門父子を助けに行った茂平の証言では，武右衛門の娘さじ（寅作宅に妻と避難した娘）が茂平宅を訪ね，武右衛門父子を助けに行くようにお願してきたので，茂平が早速行ってみると，厳原往還は膝まで水が上がってきている状況であった．武右衛門父子の自宅に着いた時，大きな音と同時に茂平は包千の松まで流されてしまったが，何とか岸に至り這い上がって助かった．その後武右衛門父子の自宅を訪ねると誰もおらず，作業している様子もなかったと記されている．実際には自宅内で作業中に家と一緒に流されているので，武右衛門妻の証言とは異なっている．

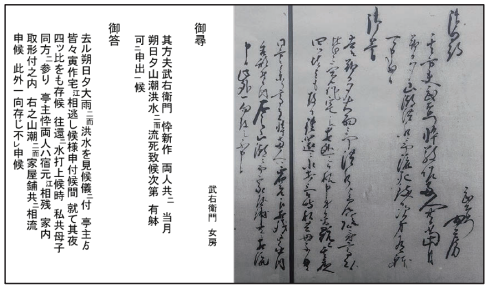
死亡報告


死人
今三日迄死骸相出不レ申候　武右衛門
同断　武右衛門　仲
昨二日死骸見出申候　新作
善助　娘　いろ
外　〆　参人
死　牛壱疋

善助の証言


御尋
当月朔日山潮二而其方娘いろ流死之次第　有躰可二申出一候
善助
御答
私儀朔日夕四ツ比大雨二而大石流出候哉　其音地震之崩出之模様二而大石流出候哉　其音地震之如く　家動キ行　聊も慥進不レ申候得共　松明を取　伜仁左衛門ニ女房子供相連させ一ッ尾ニ遣参候　娘は共ニ家内取形付之内　包千滋ニ相成候間　直ニ家出致候得共　一ッ尾ニ参りたく　西ノ谷ニ志し父子参候　道大挙谷筋之山潮ニつと打参り　父子共ニ流し別々ニ相成　瀬　櫓ニ取付　当日之内娘行方不知　菖蒲坂ニ参候　儀右衛門方ニ　たより付助命相成　武右衛門　仲　新作　善助　娘　いろ　死　牛壱疋　外　〆　参人　死人　今三日迄死骸相出不レ申候　武右衛門　同断　昨二日死骸見出申候　外　仕候儀ニ御座候

武右衛門妻の証言


御尋
其方夫武右衛門　伜新作　両人共ニ　当月朔日夕山潮洪水ニ而流死致候次第　有躰可二申出一候
武右衛門　女房
御答
去ル朔日夕大雨ニ而洪水を見候儀ニ付　亭主方皆々寅作宅ニ相遣し候様申付候間　就て其夜　四ツ比をも存候　往還ハ水打上候跡　私共母子同方ニ参り　亭主他両人宿元ニ相残　家内取形付之内　右之山潮ニ家屋鎖共ニ相流申候　此外一向存し不レ申候

武右衛門宅へ加勢　茂平の証言

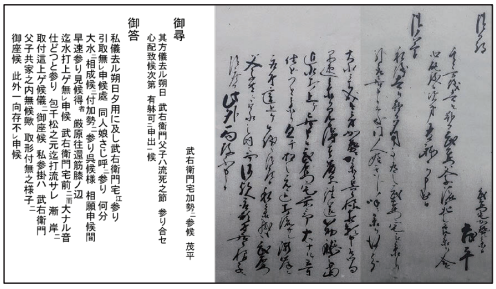

御尋
其方儀去ル朔日　武右衛門父子八流死之節　参り合せ心配致候次第　有躰可二申出一候
武右衛門宅加勢ニ参候　茂平
御答
私儀去ル朔日夕用に及し武右衛門宅ニ参り引取無レ申候處　同人娘さじ呼ニ参り　何分早速ハ相成候ハ　加勢ニ参り呉候様　無レ申候間　迄水打上ゲ無レ申候　武右衛門宅前ニ而大ナル音仕ゞつと参り　包千松之元ニ打流サレ　取付道上ゲ候儀　御座候ハ　武右衛門父子共家之内無候歟　取形付無之様子ニ御座候　此外一向存不レ申候

図 2　御用留に記載された犠牲者の被災状況

4.　被災地の特定と現在の災害リスク

前節では地名として，杓子ノ尾，一ッ尾，包千，西ノ谷，菖蒲坂，厳原往還が出てきた．厳原往還は対馬に由来する当時の道路名であるが，対馬藩領だったことから名付けられたものと推測される．日本地図を作成した伊能忠敬の記録[6]によれば，橘峠（立花峠）から藤ノ谷に抜ける山側の道を測量している（**図 3**）．これが当時の往還で、図中の矢印に沿っていることがわかる．土石流が発生した杓子ノ尾は現在の地名として残っていないが，明治時代に編纂された旧福岡県 15 郡の郡村地誌（福岡地理全誌）[5]に「杓子山　村の東南　山麓横波より絶頂十町」と記されている．その山は十坊山の北側の山を指し，その麓は土石流の土砂災害警戒区域に含まれている．以上，杓子山と厳原往還の位置関係から，厳原往還は杓子山からの出水で当時冠水していたことが推測できる．

次に，当時の地名から善助，武右衛門宅の居住地区，避難経路について考える（図 **4**）．前節の証言によると，包千には善助宅があり，茂平が流されて辿り着いた地区でもあるが

伊能忠敬作成地図
（原図を元に作成：戦前　陸軍参謀局）

ハザードマップに重ねた厳原往還

図 3　厳原往還の位置の推定

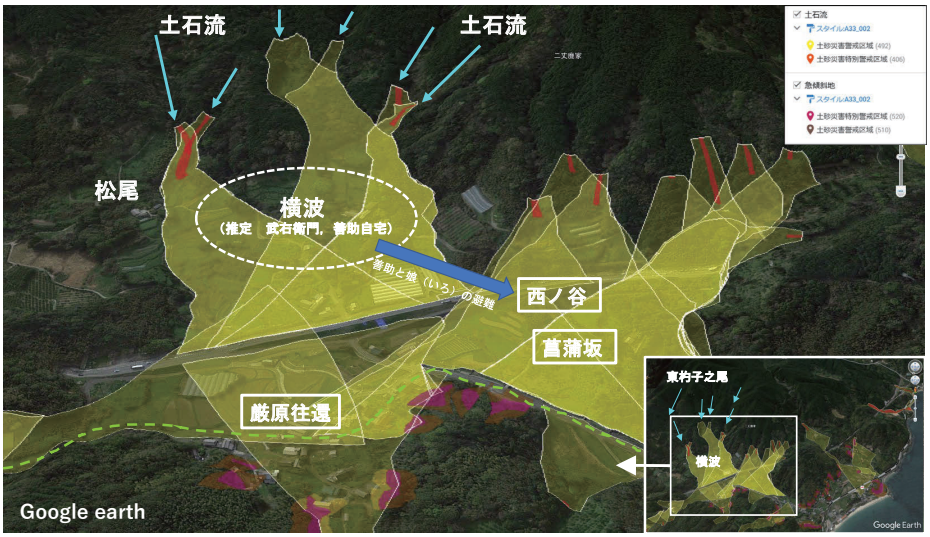


図 4　推定される犠牲者の自宅位置と災害リスク

現在の小字には残っていない．しかし，杓子山の東側から土石流が起こったこと，また，その土石流から逃れるために善助，武右衛門は家族を避難させていることから，杓子山の麓，即ち，現在小字として残っている松尾，横波付近（二丈浜玉道路の南側）だったと推測される．さらに考察を進めると，松尾は少し高台に位置し多少安全が確保できる一方で，横波が 3 方向からの土石流のリスクが大きいことがわかる．実際に，善助，いろ，武右衛門，新作，茂平が土石流に巻き込まれていることから，善助，武右衛門宅は横波にあったと推測される．そして，避難先に関して，一ッ尾の手がかりは全くないが，善助といろが向かった西ノ谷は小字として残っている．善助の自宅が横波にあったとすると，土石流のリスクがある谷を横切り，自宅から西ノ谷に向かう途中に被災したことになる．

最後に，善助が助けられた菖蒲坂について述べる．これは福岡地理全誌 [5]に記されているが現在の小字には残っていない．しかし，地元の証言では，ショウサコやショブサコと昔から呼んでいる坂（サコ）がある．その坂については，戦国時代の 1584 年，糸島の原田氏と肥前の波多氏の戦いの際，原田氏が鹿家の本陣目指して下ってきたことから名付けられたのではないかという伝承が残っている．つまり，原田氏の勝利を導いた勝負坂のことで，いつの時代からかは不明であるが，「勝負」が花の名前の「菖蒲」に変化したと考えられる．その位置は，善助といろが目指した西ノ谷の西側に位置する．

この節と前節の考察から，善助も武右衛門も家族を避難させているので災害の危険性を十分理解していたと考えられる．しかし，土石流の被災に備えて食料の移動など諸々作業をしていたと考えられ，結局避難の遅れが命取りとなってしまった．

5.　結論

嘉永 3 年（1850 年），当時の鹿家村で起こった土石流災害で 3 名の方が犠牲になったが，詳細については知られていなかった．そこで，鹿家村の古記録「鹿家村　嘉永 3 年御用留」から災害に関する資料を探し出し，その被災状況を明らかにした．その結果，梅雨末期の豪雨で土石流が発生し 16 棟の住宅が被災し，3 名が亡くなったことがわかった．2 名の犠牲者（父と息子）は自宅とともに流され，もう一人の犠牲者の女性は父親と避難途中に土石流に巻き込まれて死亡している．いずれも避難の遅れが原因である．被災地は十坊山の北側にある杓子山（当時の呼び名）の麓の横波付近と推測され，3 つの谷筋が合流し，土石流の土砂災害警戒区域に指定されていることがわかった．地元では災害当時の伝承はなかったが，以上のように災害伝承と具体的な災害リスクを明らかにすることで，鹿家地区の土石流に対する具体的な防災の取り組みに活かすことが可能となる．

参考文献：

1)　福岡市立図書館：加瀬家記録，福岡市立図書館，p.386,，1992.
2)　浜玉町史編集委員会：浜玉町史上巻，p.835，1989.
3)　二丈町誌編集委員会：二丈町誌，p.724，1967.
4)　諸岡助蔵：鹿家村嘉永 3 年御用留，福岡県立図書館，1850（嘉永 3 年）.
5)　福岡県：福岡県史　福岡県地理全誌（六），福岡県，p.738，1995.
6)　佐久間達夫：伊能忠敬　測量日記　第四巻，大空社，1998.

謝辞：

この研究の取り組みは，JSPS 科学研究費（課題番号 JP20K01144），令和 2 年度糸島市協定大学等課題解決型研究事業に基づいて実施したものです．この研究を実施するにあたり，諸岡三佳さんには鹿家村の古文書を紹介して頂き，また，横尾俊一さんには鹿家地区の案内とともに，地域の情報について貴重な情報を頂きました．ここに深く御礼を申し上げます．